

# 常光寺々報

2019年9月

## 秋季彼岸会法要

九月二十一日(土)

朝十時半〜十二時

昼一時半〜四時

武蔵野大学学院長

講師 田中 教照 先生

### 『彼岸と此岸』

### 彼岸音楽法座

九月二十三日(月)

朝十時半〜十二時



◎光輪法座 十月三日(木)十三時半

◎やすらぎ法座十月二十三日(水)十時

◎初参式 十一月三日(日)十時半

◎光輪法座 十一月三日(日)十三時半

玄関先の猿滑り(百日紅)は樹齢四百年をこえると、どの庭師も口をそろえて言います。でも、その猿滑りの樹が去年の秋の台風で痛々しげに根元から折れてしまいました。こんな折れ方をしてしまったのは助からんだらうと諦めていたら、この春に、見事に芽を吹いてたくさんの花を咲かせてくれました。猿滑りの樹のもつ生命力と庭師の腕のすごさに只々感服しています。

ご講師の田中教照先生には、学院長という大変忙しいポストにありながら、いつも気持ちよくご出講をいただいております。この不思議の強縁を喜んで、ご一緒に秋の一日をゆつくり聴聞させていたいただきたいと思えます。



## 慈悲の涙

大分県

稲田静真

「六華園」という少女の保護更生施設(園長 九條武子さま)がありました。収容されている少女のひとり、A子は万引きの常習でした。何度も施設を抜け出しては悪事をはたらき、悪事をはたらいては連れ戻されるといったことです。何度教えても諭しても「どうせ私は非行少女」と反省の様子もなく、ついに十四回目の方引きが見つかりました。緊急職員会議が開かれました。A子の処遇を話し合った結果、  
「もうだめだ、これ以上A子に矯正の見込みはない。こうなったら警察に渡した方があの子のためだ」という結果に達したのです。  
そこで森川主任が、園長である九

條武子さまのお部屋にお伺いに行きました。この次第を説明申し上げます、

お返事を待ちましたが、武子さまはうつむいたきり何ともおっしやいません。ならばと、もう一度詳しくご説明し、再度お返事を待ちましたが、依然としておこたえがありません。

どうしたのだろうと、そつと顔を上げた森川主任の目にうつったものは、下を向き目いっぱい涙をためた武子さまの姿でした。その涙が落ちて机上の本をぬらしています。しばらくしてようやく武子さまがおっしやいました。

「森川さん、A子は何回しくじつたというのですか」

「はい、今度でもう十四回目でございます」

「森川さん、十三回、十四回目です、それで、どうしても見放さなくては

ならぬのでしょうか」

「……」

「森川さん、思えば私たちは何回しくじつてきたことでしょうかね」

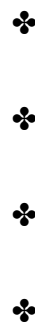
「……」

「この私は、如来さまから逃げて逃げて、いったい何回逃げ回っていることでしょうか。その私を、如来さまはお見捨てにならないではありませんか」

「……」

問題なのはA子だけではない、とおっしやる武子さまの一言。深い慈愛に満ちたお言葉とその真実は、ズツシリと森川主任の胸に響きました。罪を罪とも知らぬ私に「汝を救う、必ず救う」とただひたすらに救いの手をさしのべてくださっている阿弥陀如来であります。今、世間の常識から言えば、誰もが見放して当たり

前というギリギリの状況にあって、最後まで「救わずにはおかぬ」と涙してくださる武子さま。主任から武子さまのお心を告げられたA子は、号泣して悔い改め、その後立派に更生したのです。



厳しく叱つたり、注意することを一概に否定するものではありません。しかし、人の心を本当に動かすのは、どうもそうではないようです。

その後、武子さまは敗血症のために四二歳の若さで往生されましたが、武子さまの棺ひつねを乗せた車が通る沿道は大勢のお見送りの人々で埋め尽くされました。その一隅に赤ちゃんをおぶって手を合わせ立ちすくむ一人の若い女性、A子の姿があったと言います。

「大乘」より